

意見文指導の研究—思考力育成の観点から—

島田 綾子

はじめに

文章表現の際に思考力が使用されること、そして思考力を深めることが文章表現力につながるということは多くの研究者によって指摘されてきている。学習指導要領の国語科の目標中にも、昭和33年版以降、52年版を除き現在に至るまで「思考力」を育成することが掲げられており、表現のみならず、国語という教科の学習の中での位置づけは大きなものである。しかし、思考力とはどのようなものであるかを定義付け、定義に沿って指導を進めている例はほとんど見つけることはできない。そのため、思考力のとらえ方を明らかにし、思考力に対する一貫した観点を持った指導の方策を探りたいと考えた。

今回は、文章表現の過程で、思考力のさまざまな側面を使用すると思われる意見文について、指導の礎となる理論と理論に裏打ちされた実践を目指し、考察していきたい。

1 思考力をどのようにとらえるか

(1) 国語科における思考力の概念

国語科において、思考力とはどのような概念でとらえられているのであろうか。

戦後の国語教育に関わる先行研究を中心に考察したところ、現状としては、国語科における思考力とは何かという実態が明らかにされていないといえる。しかしながら、思考力という言葉が狭義に論理的思考力と暗黙のうちに置き換えて話しを進めている傾向が、戦後から現代まで一貫してあることがうかがえた。理由として次の二点が考えられる。

- ① 戦後に国語科における思考力が思想獲得の手段（方法）という位置づけで出発したこと
- ② 思考力を言語生活のすべてを成立させるものととらえることに縛られてきたこと

前者は、戦後の国語科改革の中で「道具教科としての国語科」と言う立場が強調され、国語科における思考力は、他の教科の基礎となる知識や思想を主体が獲得するための力であると考えられていたという背景による。思考力とは知識や思想を取り込んでいくための手段であることとらえていたということであろう。

後者は言語と思考の密接な関わりということに目を向けるあまり、思考力とは言語を支えるもの、すなわち言語技術の獲得に関わる力という一面的な見方をしがちであったということがいえるのではないだろうか。

いずれにせよ、思考力を方法論として認識してきた歴史の流れが、思考力という言葉

を狭義にとらえる傾向を生み出してきたということであろう。「日本の国語教育では『論理的思考』が多用されるのに対して、アメリカの国語教育では『批判的思考』や『創造的思考』が多く使われる」と井上尚美氏は述べている¹。我々も、思考力を様々な角度から総合的にとらえ、培っていくことが必要なのではないだろうか。

(2) 認知心理学における思考力

思考力を一層国語教育の実用の場に生かしていくために、心理学の立場を参考にしたいと考えた。心理学の中でも「思考力」そのものを学問の対象としてきた認知心理学の立場を見ていきたい。認知心理学においては思考力を次のように定義づけている。

定義：既存の知識を問題状況に結びつけ、問題を解決する際に働く能力
ここでいう知識には

①一般的知識 ②方法的知識

の二種類がある。また、問題状況とは「活動を行う目標と現実の間に差があるときに生じるもの」を指し、問題解決とは「現状を目標に近づける過程」を指している。さらに、思考には2つの様式が存在すると考えられている。

a 発見、あるいは新しいアイデアの達成

b aを証明、検証し、体系化する過程

以上について、国語教育との関連を考えてみたい。

(3) 認知心理学に国語教育が学ぶこと

思考力のとらえ方について、国語教育が認知心理学に学ぶことは

- ・ 思考力を論理的な側面に限定されることなく、多面的に考えていく視点
- ・ 思考力は問題解決過程において活用されると考える視点
- ・ 知識を二種類にわけて考えていく視点

という三点ではないかと考える。以上を国語教育の実践の中に生かしていくために、本論者において思考力の定義は認知心理学のものを取り入れたい。すなわち「既存の知識を問題状況に結び付け、問題を解決する際に働く能力」というものである。

認知心理学者の伊東昌子氏は「表現力を、問題を解決するためのプランニング能力とプランの実行能力、そして実行結果の評価能力と考えれば、表現力の育成は複雑な問題を解決するための思考力の育成にもつながる」と述べている²。また、国語教育の立場から野地潤家氏は「書くことの過程は基本的には書くことによる問題解決過程」と論じている³。認知心理学に学ぶべきことをふまえ、野地氏らの述べるように文章表現の過程を問題解決の過程ととらえるのであれば、文章表現の過程は思考力が活用され育

¹ 井上 尚美 「思考力育成への方略」 1998 明治図書刊

² 伊東 昌子 表現へのプロセスアプローチ 「認知心理学者教育を語る」 1993 北大路書房刊

³ 野地潤家 「国語教育原論」 1973 共文社

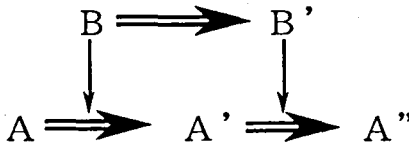
成されていく場そのものと言えるのではないだろうか。そこで、思考力の育成を目指す文章表現指導の実験を考えてみたい。

2 思考力育成を目指す文章表現指導

(1) 思考力と知識

文章表現過程の各段階で生じると考えられる問題状況を解決するための知識を書き手に与えていけば問題解決がスムーズに行われ、その結果、更なる思考力を身につけていくことができるのではないかと考えた。知識とは認知心理学を参考に「一般的知識」と「方法的知識」があるという立場に立つ。「一般的知識」とは、いわゆる知識を指し、「方法的知識」とは一般的知識を運用するための知識であり、一般的知識をどのように活用していくかと言う方法的な見通しをたてるような知識を指す。二つの知識は以下に示す<図1>のような相互関係を持つと考えられる。

<図1>



図中のA・A'・A''は「一般的知識」を表し、B・B'は「方法的知識」を表す。AをA'に変換していくのがBであるということを示している。図中の左から右への⇒は変化の過程を表し、上から下への→は変化の過程に及ぼす作用を表している。また、下から上への斜めの点線で記した矢印は、一般的知識が方法的知識を作り出す基本となることを表している。つまり、方法的知識とは一般的知識を活用して新しい発想をしていく際の観点であるといえよう。そして、その観点により結果として新しく発想されたものが、また一般的知識として主体に蓄えられていくのである。方法的知識とは一般的知識を習熟させていくものであるということができるのではないだろうか。

思考力には「a 発見、あるいは新しいアイディアの達成」という側面と、「b aを証明、検証し体系化する過程」という側面が存在することは前述した通りである。思考力が活用される場面のすべてで、「一般的知識」と「方法的知識」が使用されると考えられるが、aの新しいものを生み出すという側面は「方法的知識」に、bの生み出されたものを整理し活用する側面は「一般的知識」に比重が置かれて使用されていくといえるのではないだろうか。新しいものを生み出すためには、一般的知識も必要であるが、一般的知識をいかに活用して自分なりの方法論を確立するかということには、活用するための観点となる「方法的知識」が必要とされてくる。また、方法的知識を利用して新たに生み出されたものや、蓄えられた一般的知識を組み合わせる筋道の通ったものにしていくためには一定の規則や公式のような性質を持つ一般的知識が必要とされていくと考えられるからである。

(2) 文章表現に必要な知識

先行研究などから文章表現に必要な知識は次の4つであると考えられる。

- 1 読み手に関する知識
- 2 題材についての知識
- 3 言語的知識
- 4 目的に関する知識

この4つの知識について、それぞれ「一般的知識」と「方法的知識」を分類しまとめたのが<表1>である。この表を作成するにあたっては、奈良国語教育実践研究会編「課題条件のための基本事項一覧表」を参照した。

例えば、「A 読み手に関する知識」であれば、一般的知識として必要なものは読み手の理解である。具体的には、a 読み手が文章を読む理由、b 読み手の立場、c 読み手の話題に対する関心度の認識という3項目があがっている。方法的知識として必要なのは、読み手に対する対応であると考えられる。具体的には、a 読み手が読みやすい工夫、b 読み手の興味を引く工夫、c 読み手が納得する工夫、d 読み手の既有知識に対応する策という4項目をあげることができよう。目的に関する知識、題材に関する知識、言語的知識についても同様に一般的知識と方法的知識に分類してまとめてある。

(3) 意見文の表現過程と知識

次に、具体的に意見文という文種にしばり、意見文の表現過程においてどの段階でどのような知識を授けていくことが適切であるかを考える。意見文の表現過程を思考力に関わせたものが<表2>である。表中の文章表現過程②から④までで使われている力は、新しいものを生み出す、という性質を持ったものであり、⑤以降で使われる力は新しく生み出されたものを整理し活用するという性質を持ったものであると考える。例えば、②のキーワードが決まると言う段階では一般的知識として「読み手の理解 a 読み手がこの文章を読む理由、b 読み手の立場、c 読み手の話題に対する関心度の認識」、 「目的的理解 a 何を目的に文章を書くのか、b 目的の種類」が、また方法的知識としては「対応 d 読み手の既有知識の違いに対応する策」、 「自覚 a 目的に応じたまとめ方・文章形態」が必要になると考えられる。数の上では、一般的知識として必要とされるもの6つに対して方法的知識として必要とされるものが2つとなっているが、重点的に使用するの文章を書く上での見通しを立てていく方法的知識であると考えられる。他も同様に考えられるので、②から④では「方法的知識」が、⑤以降は「一般的知識」が重点的に使用されるといえよう。

(4) 思考力を育成する環境の設定

今まで述べてきたように、思考力の育成には知識が重要な役割を果たしていると考えられるが、思考力を育成するための環境の設定も必要とされる。具体的には以下の二点

が考えられる。

- ・ 知識を必要とする場の設定
- ・ 書く気を起こさせるような題材の選定

このような環境の設定を指導者が行っていくことも思考力の育成のためには欠かせないことであるといえよう。

3 思考力を育成する意見文指導の実際

以上をふまえ、以下のような指導の実際を行った。

単元：日常生活の中から意見文を書く（高校1年生）

課題 「新聞記事に対して自分の意見を書く」

課題設定の理由

思考力を活用すると考えられる場面が多く、同時に思考力育成のための状況設定がしやすいため

目標 既存の知識や獲得した知識を活用して、自らの問題状況を解決することができる。

- 下位目標
- ① 自らの興味の対象を適確にとらえ、対象について独自の意見を持ち、表現することが出来る。（一般的知識の活用）
 - ② 読み手に理解しやすく、しかも説得力を持つ構成の工夫が出来る。（方法的知識の活用）

指導計画 <表3>参照

なお、それぞれの指導項目において、思考力を支える2つの知識のうち、どちらが主に使われるかを表の右側に示した。

4 考察

(1) 指導をふまえた考察

以上の指導計画によって実際の授業を行ったところ導かれた結果は、次に示す三点である。

- ① 書き手が自らの状況を把握することのできる指導を心がけることの必要性
- ② 書き手が何を問題状況としているかを指導者が的確に捉えることの重要性
- ③ 問題状況を自覚したうえで二種類の知識を活用して解決をしていくことが文章表現力の向上につながる可能性が高い

①に関しては、意見文とは何かということを生徒に意識させることから始まり、自分が今どのような現状にあるのかを自覚させ、どのような目標状態に到達できればよいかを把握させることが思考力育成の基礎となるものと考えられる。

②に関しては、書き手が問題状況を解決するにはどのような支援をしていくべきか、一般的知識を授けること、方法的知識を活用できる場を設定することなど、見極めてい

かなければならないと思われる。そして、最終的には指導者の支援なく一人で作品を完成させられることを目指した系統的な指導を考えていくべきであるといえるのではないだろうか。

③に関しては、なにが問題状況であるかという自覚をせずに文章表現に取り組むことは、問題を解決していく工夫を行わないことにつながる。すでに蓄えられている知識にあてはめることで満足してしまうと、思考力育成は望めないと考えられよう。

以上3つのうち、①②は指導者側の問題であるが、③は書き手が克服していくべき問題であるといえる。従って、③は書き手の思考力の育成を考えていく際に、最も大きな課題になり得るのではないか。実際の指導の中から大半の生徒は「一般的知識」のみで問題状況を解決しようとする傾向があることがわかった。そのような傾向の生徒達に「方法的知識」の活用ができるようにしていくことが、思考力向上の鍵を握るのではないだろうか。

(2) 思考力育成のために

方法的知識を活用させることに留意した指導の方向性として考えられるのは次の3点である。

- ① 方法的知識につながる一般的知識をあたえていくこと
- ② 思考力を活用させることを意識させること
- ③ 自分以外の豊かな発想を知ること

具体的にはディベートのような学習活動をしていくことが有効なのではないかと考える。ディベートは問題状況に対する自覚を持ち、工夫をしていくことのできる姿勢を身につけさせるのに有効であると思われるからである。自分の立場に説得力を持たせるにはどのような材料を収集し表現していくかという問題状況は自覚されやすく、また、同じ結論を導くにも様々な観点があり根拠があることを実感する中で、視野が広がることが予測される。

5 今後の課題

今後の課題として導かれたことは以下の4点に集約できるとと思われる。

- ① 思考力の育成に資する教材の開発
- ② 様々な場面での思考力の育成
- ③ 発達段階に即した系統的な指導
- ④ 完成作品の見通しを持った題材やテーマの選定

以上の課題を克服していくことにより、思考力育成の観点からの意見文指導は豊かなものになっていくと考えられるのではないだろうか。

<表1>

	一般的知識	方法的知識
A 読み手に 関する知識	読み手の理解 a 読み手がこの文章を読む理由 b 読み手の立場 c 読み手が話題に対する関心度の認識 (有無・あるならどの程度か)	対応 a 読み手が読みやすい工夫 b 読み手の興味を引く工夫 c 読み手が納得する工夫 d 読み手の既有知識の違いに対応する策
B 目的に 関する知識	目的の理解 a 何を目的に文章を書くのか b 目的の種類 ① 自己の内面の整理 ② 読み手に意識の変容を訴える	自覚 a 目的に応じたまとめ方・文章形態 b 読み手にどのような意識の変容を促すかの自覚 c 自己の内面整理をした結果の到達点の自覚
C 題材に 関する知識	題材の理解 a 題材に関する書き手の立場 b 書き手の題材そのものに関する認識 c 題材の社会的評価 d 題材の認知度	価値 a 題材に関する書き手の立場の決め方 b 題材の価値付けに関する観点の持ち方 c 社会的評価を考慮した論の進め方、 結論付け方 d 題材の集め方 e 題名の付け方 f 主題・論点の決め方
D 言語的知識	言語的知識の理解 a 発想法 ブレンストーミング・KJ法・意味 マップなど(構成メモ・表の作り方) b 構想の立て方 ① 構成の型 ② 段落の軽重 ③ 中心段落の位置づけ ④ 主題の出し方 ⑤ 適切な段落・材料の配列法 c 叙述・文体 ① 語句の正確さ・適切さ ② 文の形式・構造 ③ 文章のまとまり・簡潔さ ④ 叙述のタイプ ⑤ 文体の統一 ⑥ 修辭 d 表記 ① 文字・送り仮名 ② 符号 ③ 用紙の使い方 e ことばの使い方や文法的知識 f 推敲の知識	効果 a 発想した材料の論点や主題に即した 組み合わせ方(構成メモ・表の活用方) b 効果的な構成にするための判断の基準 c 適切な叙述や文体の選び方 d 見直しの観点の持ち方

<表2>

文章表現過程	知識	
① 意見文を書く目的を認識する	読み手の理解 b 目的の理解 a・b	
② キーワードが決まる	読み手の理解 a・b・c 目的の理解 a・b 題材の理解 a	対応 \boxed{d} 自覚 \boxed{a}
③ 思いついたことなどを書き留める	読み手の理解 a・b・c 目的の理解 a・b・c 題材の理解 a・b・c・d 言語的知識 a・e	対応 $\boxed{a} \cdot \boxed{c} \cdot \boxed{d}$ 自覚 \boxed{a} 価値 $\boxed{a} \cdot \boxed{c}$ 効果 \boxed{c}
④ 結論を決定する	読み手の理解 b・c 目的の理解 a・b・c 題材の理解 b・c 言語的知識 e	対応 $\boxed{a} \cdot \boxed{c}$ 自覚 $\boxed{a} \cdot \boxed{b}$ 価値 $\boxed{a} \cdot \boxed{b}$ 効果 \boxed{c}
⑤ 結論を支えるものを②から吟味する	読み手の理解 a 目的の理解 b 題材の理解 a・b・c 言語的知識 b・e	対応 $\boxed{a} \cdot \boxed{c} \cdot \boxed{d}$ 自覚 $\boxed{a} \cdot \boxed{c}$ 価値 $\boxed{a} \cdot \boxed{b}$ 効果 \boxed{a}
⑥ 構成を考える	読み手の理解 a・b・c 目的の理解 a・b・c 題材の理解 c 言語的知識 c	対応 $\boxed{b} \cdot \boxed{d}$ 自覚 $\boxed{b} \cdot \boxed{c}$ 価値 \boxed{b} 効果 \boxed{b}
⑦ 記述する	読み手の理解 a・b・c 目的の理解 a・b 題材の理解 a・b・c 言語的知識 d・e・f	対応 \boxed{e} 自覚 $\boxed{a} \cdot \boxed{b} \cdot \boxed{c}$ 価値 \boxed{b} 効果 $\boxed{c} \cdot \boxed{d}$
⑧ 題をつける	読み手の理解 a 目的の理解 a・b 題材の理解 b・c 言語的知識 e	対応 $\boxed{a} \cdot \boxed{d}$ 自覚 \boxed{a} 価値 \boxed{d} 効果 \boxed{c}

<表3>

指導の流れ	指導項目	一般的知識	方法としての知識
第一次 学習内容を理解する	・ 学習内容、目標をつかませる。	◎	
	・ 意見文のもととなる新聞の記事を選び読ませる。	◎	○
	・ キーワードを決めさせる	○	◎

指導の流れ	指導項目	一般的知識	方法としての知識
第二次 書く内容を決める	・ 思いついたことを書き留めさせる (ブレンストーミング、表の活用)	◎	○
	・ 結論、論点を決定させる	○	◎
	・ 結論を支えるものを吟味させる	○	◎
第三次 構成を考える	・ 構成のパターンを知らせる	◎	
	・ 結論の位置を考えさせる		◎
	・ 自分の文章に合うパターンを考えさせる		◎
	・ 結論を支えるものの配列を考えさせる		◎
第四次 記述する	・ 記述させる	◎	○
	・ 文章に即した題名を付けさせる	○	◎
第五次 評価する	・ 相互評価させる	○	◎
	・ 自己評価させる	○	◎

(しまだ あやこ 國學院高等学校講師)